

第二章 郷土の黎明

われわれの祖先が水戸の台地に住みついた最初の遺跡は、藤井町十萬原に見られる。その時期は洪積世紀の末期にあたり、わが国がようやく大陸から分離した頃である。

洪積世紀のわが国は、まだ大陸の一部をなし、火山活動が活発な時代で、つねに火山の噴火による降灰にさらされ、また北半球を覆った氷河の影響をうけて、寒気に見舞われるなど、気候の激変した時代であった。

しかし、このような洪積世紀にも、暖地系のナウマン象や、寒地系のアオモリ象の棲息できた平穏な時期があったことが知られている。

洪積世紀の末から沖積世紀の初めになると、わが国は大陸から完全に離れたが、この頃にはわが国にも、人類が住むようになったらしい。それまで激しく活動した火山も下火となり、藤井町あたりにも、ようやく草木の繁茂が見られるようになった。この原始時代の住民は石器を打ちかいて道具とし、数千年にわたって生活を営んだが、土器を作るまでにはいたらなかった。

そこで、この石器だけを生活用具として用いた時代を、考古学では無土器時代とよんでいる。

無土器時代の後、石器のほかに土器を用い、狩猟や漁撈（ろう）を行なって活気に満ちた時代が訪れるようになった。この時期に使用された土器は、一様に縄目の文様があるところから、縄文式土器といい、その土器を使用した時代を縄文式時代とよんでいる。水戸では八幡町遺跡から最も古い土器が出土しているし、最も新しい時代のものとして、渡里町アラヤ遺跡の土器が明らかにされている。

まだ水戸地方の人々が縄文式土器を用いて生活していた西暦紀元前

一、二世紀の頃、北九州や西日本では、すでに大陸文化の影響をうけて、水稲耕作と金属器を使用する高度の文化が発達していた。水戸地方が、この文化の浸透をうけて、農耕生活を展開した時期は、水戸の柳河町遺跡によると、少なくとも紀元一世紀以降のことであるらしい。

この農耕文化の発達した時期を、弥生式時代といい、この時代は紀元三世紀頃まで繁栄した。

第一節 狩猟と採集の生活

旧石器時代と十万原遺跡

一般に火山の噴火にその生活をおびやかされた洪積世末期から沖積世初めの人々の遺物は、火山灰の堆積した層の中から発見される。この遺物の発見される堆積層は、南関東地方の多摩丘陵や、武蔵野台地をはじめ、北関東地方の常総台地、那珂川兩岸の台地など関東地方の台地に普通にみられる。地質学ではとくに関東ローム層とよんでいる。群馬県岩宿（いわじゆく）遺跡（1）や全国各地から発見される石器の材料には黒耀石や頁（けつ）岩・安山岩・水晶などの比較的硬い礫石（れきせき）が好んで用いられ、その多くがローム層の上部に発見されることがわかってきた。

最近では、これらの遺跡の整理によって、大まかではあるが相対的な編年さえできるようになった。（第一表）

第1表 無土器編年表
無土器時代文化編年（関東地方）

地質年 代区分	ヨーロッパ 旧石器時代区分	ヨーロッパ 絶対年代	氷期年代区分		現在の温度を0°C とした時	火山	地質区分		文化層編年	石材質		
							南関東ローム (厚さm)	北関東 ローム				
沖積世		10,000							縄文式時代創草期			
洪 積 世	後 期	11,000	新ドリラス期 W 4	ウ ユ ル ム (第 4) 氷 期	-6°	古 富 士 火 山	●立川ローム 2m	上部ローム	※ 最盛期ポイントを主とする文化	上ノ平	〔硬質頁岩〕 安山岩 黒曜石 玉髄 チャート	
		12,000	アレレード期		温				原始的ポイントを主とする文化			武井II
		18,000 ±	旧ドリラス期 W 3		-6°				最盛期ブレイドを主とする文化			茶白山
		20,000 ±	W 2		-8-9°				特殊なブレイドを主とする文化			茂呂
		後期 初めか 中期末	ア ランデン ブラグ期	温			立川礫層 2~7m	中部ローム	切出形石器を主とする文化	岩宿II		
	5~60,000 ±	ア W 1	-7-8°	原始的ブレイドを主とする文化	武井I 岩宿 椎現山II	●武蔵野ローム 5m	ハンドアツクスの存在する文化		椎現山I			
		中 期	約150,000	リス・ウユルム(第3)	暖(+2°)		山手礫層 武蔵野砂礫層	下部ローム		不二山 ?	〔安山岩〕 玄武岩	
	約240,000		間氷期			箱火 根山	●下末吉ローム 7m					
		前 期	約380,000	リス氷期	-8-9°		●下末吉層 (東京層・成田層) 1~30m					
	約450,000		ミンデル・リス(第2)	涼		古火 箱 根山	●多摩ローム 20m					
約550,000	ミンデル(第2)		-6-8°									
約280,000	氷期		海水	-5-6°								
		~1000,000	ギュンツ・ミンデル(第1)	暖		(略)						
		約600,000	間氷期	-6°?								
		~2,000,000	ギュンツ(第1)氷期	海水	-4-5°							

世界考古学大系1により※印は日本歴史(原始および古代)により作製する



第1図 十万原出土石器 実測図 - 藤井町 -

それによると、無土器時代の文化には

- 1 握槌形の斧のような使い方をした石器の時代（握槌形石器）
- 2 ものを切ったり削ったりする石器を用いた時代（刃器形石器）
- 3 削ったりすり切ったりする石器の時代（搔器形石器）
- 4 穴をあける錐のような石器を使用した時代（揉錐形石器）
- 5 手槍の先端につけられる尖頭器形の石器を用いた時代（尖頭器形石器）

などの時期があって、握槌形のものから尖頭器的な石器へと発達したことが考えられる。

水戸ではいまから一〇年程前（昭和三八年）、藤井町の北方標高四〇メートル位の十万原二の沢の台地上から一個の打製の石器が発見された。石器は長さ三・九センチ、最大巾一・六センチで先端が尖り、両側に加工がほどこされ、とくに一辺は鋭い刃をそなえている。前の分類からみると刃器形石器、すなわちナイフブレードに属するものである（第一図）。この石器は発掘調査によって直接発見されたのではなく、地表で採集したものであるから、どのような場所にあったものか、またどの地層に埋没していたのか遺跡の内容がはっきりしない。この石器の発見によって縄文式時代以前に、水戸市にもわれわれの祖先が生活していたことがおぼろげながらわかってきた。彼らが生活した十万

原の台地は水戸市街の台地からみると、さらに十数メートル高い台地であり、しかも台地そのものは狭いながらかなりひらけた土地であるから、防禦にも食糧を得るためにも便利であったことが考えられる。

このころ、ヨーロッパやアジア大陸では、旧石器時代人は洞窟に住んでいたことが明らかにされている。

しかし、わが国では石器が発見された場所が、平坦な台地上であったため、洞窟遺跡のあることすら明らかでなかった。最近になって、全国各地から無土器時代の人々の住んだと思われる洞窟遺跡も発見されるようになったので(2)、今後の研究によっては、この時代の人々の住居についても明らかにされるであろう。また食生活についても、群馬県岩宿遺跡のほか、各所から植物の炭化物が発見されているから、当時すでに火を使用していたとも考えられる。ただ当時の食物がどのようなものであったかは、わずかに鳥獣魚類や木の実をたべたものであったろうと推定されているにすぎない。

狩猟と採集

藤井町十万原の台地にわれわれの祖先が住みついた無土器時代は、わが国における人類文化の黎明期であったが、この無土器時代から縄文式時代にいたるまでには、なお多くの年月がつかやされた。しかし無土器時代の文化から縄文式時代早期の文化にどのように発展したか、その事情はまだ明らかでない。

沖積世紀に入ると、日本列島は完全に大陸から分離したし、一時寒くなった気候も、この世紀の末頃から再び暖かさをとりもどした。

そして氷河が後退するにつれて、海水面が上昇したため、陸地の一部は沈み、上昇した海水は内陸に向かってあらゆる谷に流入した。東京湾付近では、この現象を有楽町海侵(かいしん)と呼び、遠く川越市

付近にまで及んだといわれる（第一章第二節の二参照）。

この海侵は約一万年前後に起こって、五千年前に最高潮に達したと考えられているが、水戸市付近は一面の洪積台地で、那珂川の谷以外には谷らしいものはなかったから、地形的には洪積世末期ごろとさほど変わらなかったように思われる。

縄文式時代の人々が洪積台地上に生活したとはいっても、無土器時代の生活地域であった藤井町十萬原の台地に比べて、標高三〇メートルから一五メートルの低い台地であり、その生活地域も無土器時代よりはるかに住みやすく、食糧の求めやすい平地に移動していたと考えられる。

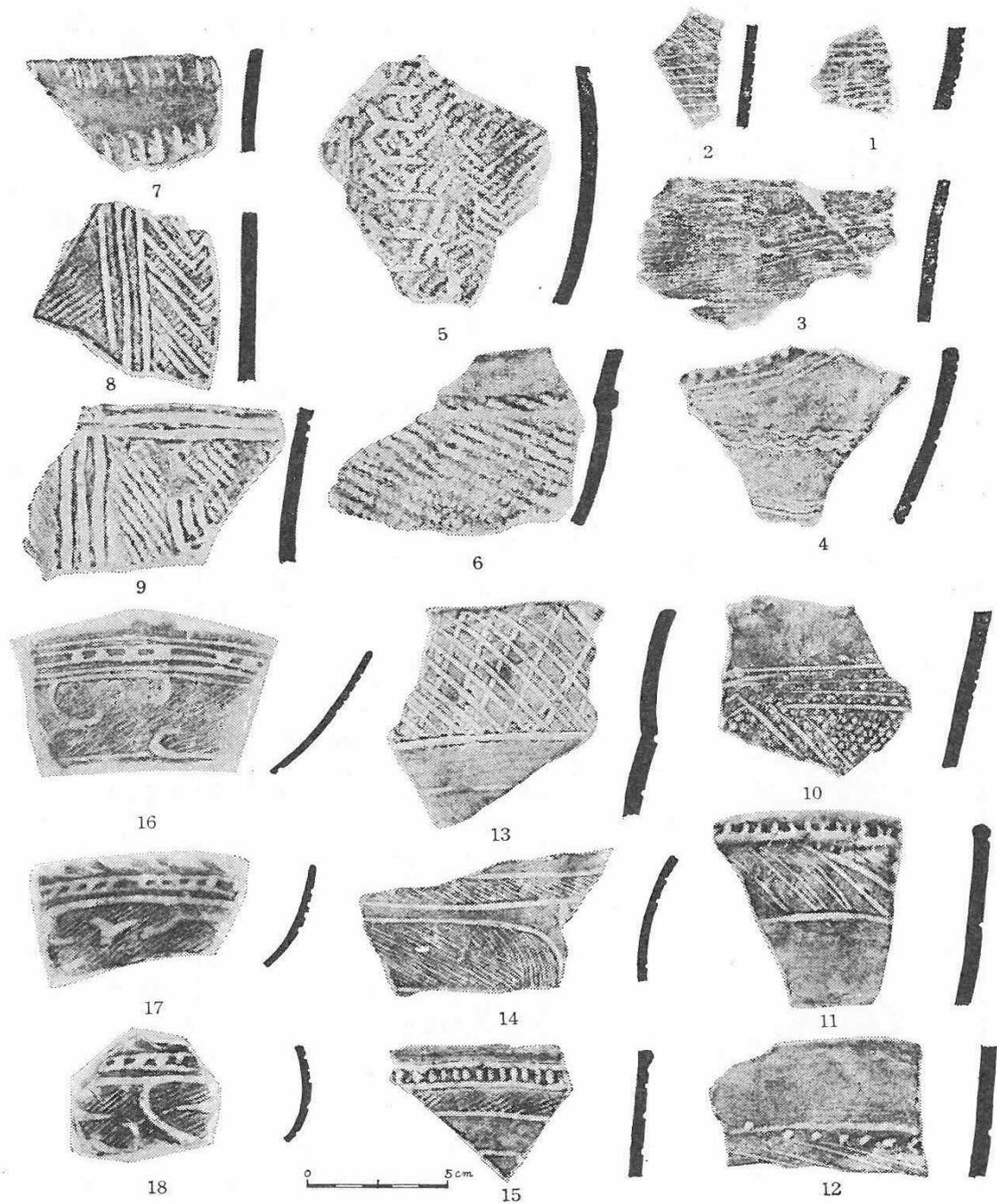
無土器時代の後に続いた縄文式時代は、紀元前数千年から弥生式時代に連なる紀元前一、二世紀まで栄えたので、土器の文様にも、その形の上にも、時代によりまた作った人々の好みによって、多くの変化がみられる。そこでこの変化をもとに縄文式時代を早期・前期・中期・後期・晩期の五つの時期に区分し、さらにそれぞれの時期をいくつかに分けることができる（第二表）。しかし、この形式編年はあくまでも相対的な区分で、実年代を示したものではなかった。ところが戦後、放射性炭素による年代測定が試みられるようになった。それは、遺跡に残された炭化物から炭素の半減期を求め遺跡の実年代を推定（3）しようとする方法であるが、この科学的操作をとり入れることによって、この時代の研究は大きな進歩をとげたのである。

縄文式時代の土器のうち最も古い形の土器は、底の尖った砲弾状か深鉢形のもので、口径三〇センチ、高さ三五センチ前後の中形の土器が多く、まれに小形の土器が使用されている。この土器は縄文式土器といっても、前期以後の土器のように明瞭な縄目文は見られず、撚糸（よりいと）文や押形文・沈線文（ちんせんもん）を付している。

縄文式土器編年表

区分	ラジオ・カーボンによる測定	水戸付近主要遺跡名	関東南部	奥羽南部	備考 ※(裏面拓影を参照)
早期	夏島貝塚・夏島式土器 B. C. 7, 491±400年 黄島貝塚・黄島式土器 B. C. 6, 443±350年	八幡町、八幡神社境内	大丸・井草 夏島台 稲荷 花輪台1・大浦山 花輪台2・平坂 三戸 田戸下層1 田戸下層2 田戸上層1 田戸上層2 子母口-----? 野島 鶉ヶ島台 茅山下層 清水坂 茅山上層菊名1	大平 素山下層 槻木1・常世山 素 槻木II・上川名I	第1図第2図参照
前期	加茂遺跡・水子式土器 B. C. 3, 145±400年	大串貝塚 谷田貝塚	菊名2 (+) 下組 野中 ニツ木 関山 (文蔵) 黒浜 a 水子 諸磯式 b { 四枚烟 矢上 c 草花 (十三坊台)	室浜・上川名II 大木I 大木2a 大木2b 大木3 大木4 大木5 大木6	
中期	姥山貝塚・加曾利E式土器 B. C. 2, 563±300年	吉田貝塚 (全隈集石址)	下小野・五領ヶ台 阿玉台1 勝坂1 阿玉台2 勝坂2 加曾利E 1 2 (3)	大木7 { a 大木8 { b 大木8 { a 大木 { b 大木 { 9	第4,6図参照 第8図参照 第7,9図参照
後期	検見川遺跡	谷田遺跡	称名寺 堀之内 { 1 2 加曾利B { 1 2 曾井 (安行1)	大木10 大門南 宝ヶ 新金山 剛	前境 崎 地寺 第10図～第13図参照
晚期	安行式土器 B. C. 1, 122±180年 B. C. 0年	全隈集石址出土 渡里町アラヤ遺跡	安行 { 2 3C 石神 (安行3b) 真福寺 (安行3c) (+) 桂台	(+) 大洞 { B~C 大洞 { B 大洞 { C1 大洞 { C2 大洞 { A	第16図～第18図参照
	A. D. 0年				

第2表 縄文式土器編年表



第2図 縄文式土器拓影

1. 吉田町（早期） 2. 元吉田町（早期） 3. 吉田町（前期） 4. 5. 6. 7.
 8. 9. 吉田町吉田貝塚（中期） 10. 谷田町（中期） 11. 谷田町（後期） 12.
 吉田町（後期） 13. 谷田町（後期） 14. 15. 吉田町（後期） 16. 17. 18.
 渡里町アラヤ（晩期）

八幡町出土の土器

市内では八幡町にある八幡宮の境内から撚糸(よりいと)文土器が、元吉田町・藤井町・田谷町などのかなり広い地域から沈線文式土器が、発見されている。

撚糸文土器は縄文式土器のうちでも、最も古い時期のものと考えられており、その分布は主として関東地方南部以西にある。八幡町で発見された土器は、三センチ位の破片で、稻荷台式土器(撚糸文系の土器のうちでは最も新しい時期のもの)に属するものであるが、ただ一片が採集されたにすぎないので、その文化の内容は明らかでない。沈線文式土器は稻荷台式土器より新しく、早期の半ばにあらわれた土器である。この土器は関東北部以東に多く発見されるが、市内から発見されるものは、主として田戸下(たどか)層式土器である。

田戸下層式土器も稻荷台式土器と同じように尖(とが)り底ではあるが、漏(ろう)斗状や円錐形の底をもち、文様はサルボウなどの貝殻の口唇部を押し付けて文様とした貝殻文や竹管文、刺突(しとつ)文をほどこしているものが多い。押形文系の土器は水戸付近では発見されていない。

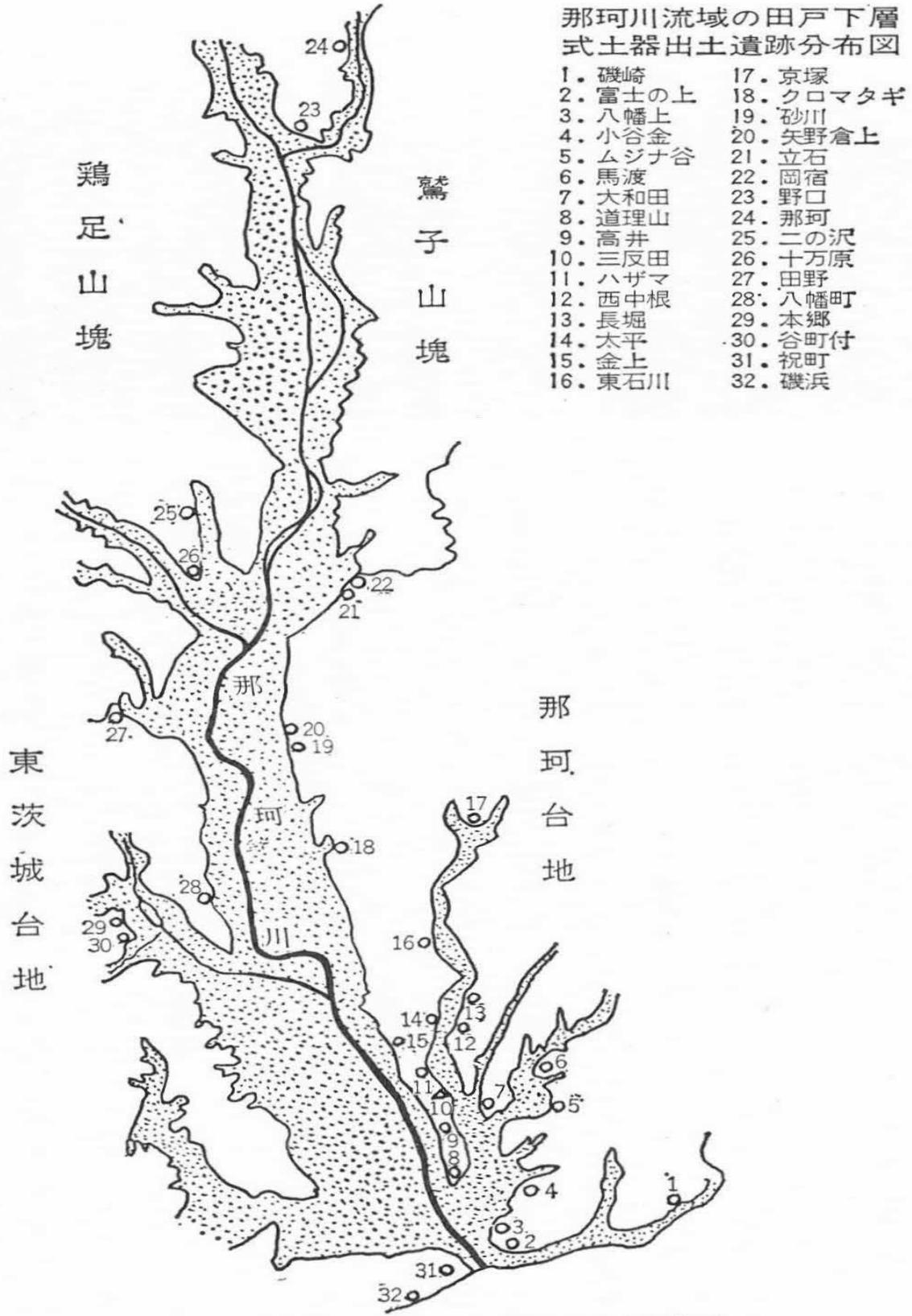
水戸地方で発見される撚糸文と沈線文による二つの早期縄文式土器をみると、水戸付近では、南関東以西の文化と、北関東以東の文化が混在していることが考えられる。この傾向が縄文式時代早期だけでなく、縄文式時代から弥生式時代にいたる数千年にわたってみられることは、水戸という小地域でなく、那珂川流域を含む常陸地方の特異な現象であることに注目すべきであろう。

早期のはじめ頃、生活した人々の住居については、あまり明らかでないが、夏島遺跡(4)ではローム層上に直径一五メートルの範囲に五、六〇個のこぶし大の自然石をならべて炉としたことが明らかにされて

いるから、この時期にはまだ火山灰の堆積層の上に生活していたと推定してよいであろう。また早期の終わり頃になると長方形の竪穴（たてあな）住居も現われたらしい。しかしこのような例はきわめてまれである。水戸市付近では発掘されたことがなく明らかではない。那珂川流域では、田戸下層式土器を出土する遺跡は極めて小さく、かつ遺物も少ない上に、その遺跡がいくらかの距離をおいて発見されている（5）。おそらくこの時期には食糧となる草木や動物が極めて少なく、人々は常に食を求めて移住しなければならなかったことを示しているように思われる（第三図）。

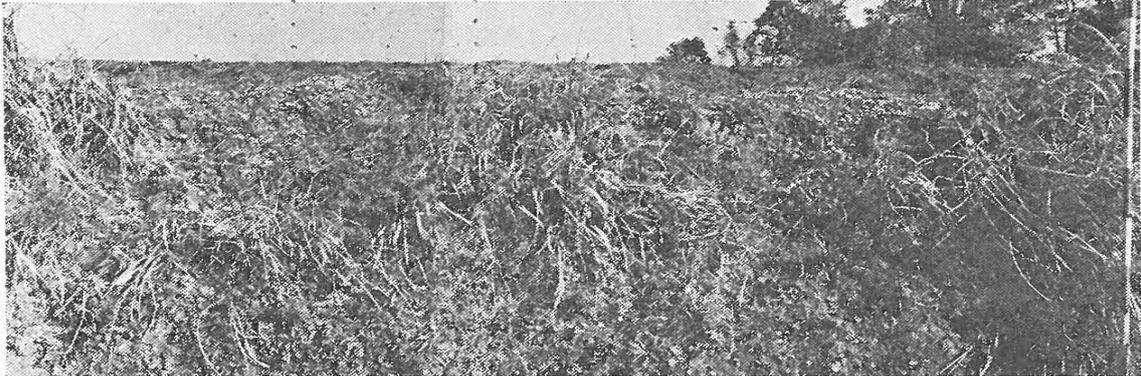
一般に、撚糸文式土器を用いた人々は、狩猟を主とした生活を営んでいたといわれるが、沈線文式土器を用いた田戸下層式時代になると、漁撈も盛んに行なわれるようになった。諸地方におけるその遺跡からは、ハマグリ・アサリ・マガキ・ハイガイ・ヤマトシジミなどの二枚貝や、ツノガイ・ヒダリマイマイなどの角貝・巻貝から・マダイ・クロダイ・マグロ・ボラ等の魚類、キジ・カモ・イノシシ・ニホンジカ・タヌキ・イタチ等の鳥獣類の骨が発見されている。これらの鳥獣の捕獲にはかなり多くの石器が用いられたらしい。

水戸地方でも、田野町からは鳥獣などの皮はぎに使用されたと思われる石小刀（石さじ）が発見されているほか、石鏃や石槍・釣針・銚（もり）・石斧・礫器（れきき）などが出土している。また釣針や銚などのように、イノシシやシカの骨を加工したものもあった。とくに石斧は多量に発見されており、その原石は那珂川上流の御前山村野口辺を中心に、水戸地方をはじめ各地に供給されたらしい。おそらく加工しやすく、かつ運搬できる石材として交易され、それぞれの集落において石斧や石鏃として加工されたのであろう。



第3図 那珂川流域田戸遺跡分布図

このように縄文式時代の早期半ば頃、水戸付近では沈線文を好んで用いた田戸下層式時代の人々の活躍がみられた。しかし、その後は水戸をはじめ那珂川流域では、前期にいたるまで、その活動のあとを示す遺跡は発見されていない。



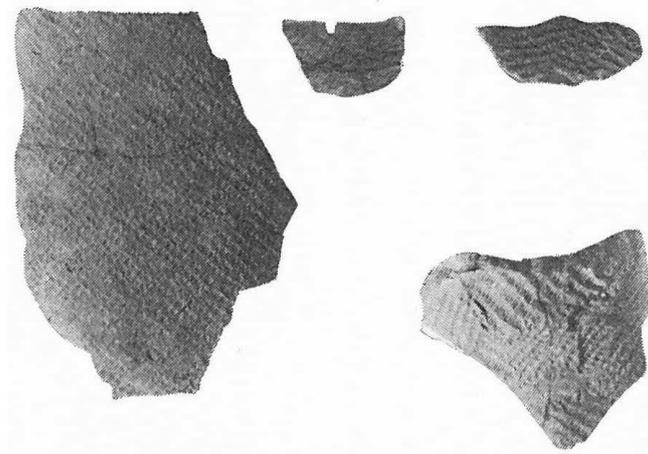
第4図 谷田貝塚全景 —谷田町—

谷田貝塚

縄文式時代の前期の頃、今の谷田（やだ）町の東北斜面あたりには静かな海水がただよっていた。この谷田町の台地は、標高一五メートルから二〇メートル位の緩やかな丘陵をなし、古くから縄文式時代後期以降の遺物を豊富に出土するところとして知られていた。この丘陵がさらに北側に伸びて、舌状の台地となる所は、旧水浜電車線によって切断されている。この電車線によって、断ち切られた台地の東北の斜面に、わずかではあるが貝層の露出した場所が見うけられる。これが谷田貝塚とよばれる遺跡である（第四図）。

この貝塚が発見された時期は明らかでない。しかし、貝塚が線路によって切断されたと考えると、旧水浜電車線の開通した大正十一、二年の頃であろう。現在貝層の露出しているのは東北側の斜面だけで、西側の斜面や台地上には貝層も貝殻もまったく見あたらず、また北西の台地上にも貝層は露出していない。したがって貝塚の主要部はもと

線路上に存在していたが、電車線敷設工事の際、その大半が消滅したものと考えられる。昭和三十六年十二月、貝塚を発掘した際、以上のことから、北側台地上には幾分貝層が残されているものと見て、電車線にそって、台地の斜面から一メートル離れた地点に、巾二メートル・長さ八メートルの溝を掘ってみた。ところが表土層の約三〇センチほどは一面に耕作のためにかく乱され、場所によってはローム層に達する個所もあった。トレンチの西側、すなわち電車線の側より巾五〇センチ、ほぼトレンチの中央部には、表土層下四〇センチ付近から貝層の堆積がみられ、一・二メートルの深さまで続いてローム層に接していることがわかったほか、ローム層に一種の落込みのあることを確認した。この落込みが何であるかは不明であるが、周囲の地層からみて、住居址ではないように思われる。



第5図 谷田貝塚出土土器 —谷田町—

貝層は表土下四〇センチより一・二メートルにわたる約八〇センチの混土貝層で、純然たる貝だけの層（純貝層）や混貝土層（貝層があまり多くない層）はなく、層中には何の変化もみとめられない。また貝層から発見された遺物はわずか五片の土器にとどまり（第五図）、石器類や、その他の遺物も発見されなかった。しかし貝層に連なるトレンチ

の内部からは縄文式時代後期の加曾利（かそり）B式土器に伴う注口土器（土びん形土器）の一部が出土した。

貝層から発見された土器は縄文式時代前期の中ごろに位置する土器で、その表面に荒い単斜行縄文をつけているものと、羽状縄文文様がみられる大形の深鉢の土器であることがわかる。この土器は関山式土器といわれ、早期の稲荷台式土器や田戸下層式土器が、尖底で不安定なために底を土中に埋めて使用したのに対して、小さくはあるが底を平底にするなど、かなり技術的改良をほどこしている。しかし、土器に多量の植物繊維がみられるのは改良したためか、趣向的なものであったかは明らかでない。

以上、この貝塚が割合、小規模のものであったことと、混土貝層だけで純貝層のなかったことなどのことから推定すると、この貝塚を営んだ人々が、短期間しか付近に住んでいなかったことを示しているのか、あるいはその貝塚が住居の期間の中だけ営まれたものであったか、どちらかと考えられる。貝塚を構成している貝は、ヤマトシジミとハマグリ・カキ貝で、そのうちヤマトシジミが九〇パーセントをしめているのは、とくにヤマトシジミが多くとれたためか、好んで食べられたためであろう。

常陸国風土記にあらわれた大串貝塚

那珂川流域に谷田貝塚のできた頃、下流の東茨城郡常澄村大串にもう一つの貝塚が営まれていた。谷田貝塚から六キロ程離れた地点である。この貝塚を大串貝塚とよぶが、貝塚は谷田貝塚の台地が涸沼川と那珂川の谷によって切れる先端の台地上にあり、奈良時代に書かれた地誌「常陸国風土記」那珂郡の条には

「平津（今の平戸付近か）ノ駅家（うまや）ノ西一二里ニ岡アリ。名

ヲ大櫛（くし）トイウ。上古（いにしえ）ニ人アリ、体極メテ長大（おお）キニ身ハ丘（お）壟（か）ノ上ニ居リテ、蟹（うむぎ）ヲ採リテ食（くら）イキ。ソノ食エル貝、積聚（つも）リテ岡ト成（な）リキ。時ノ人大キニ朽チシ義（こころ）ヲ取リテ、今大櫛（くし）ノ岡トイウ。ソノ大人（おおびと）ノ踐ミシ跡ハ、長サ三十余歩、広サ二十余歩アリ、尿（ゆばり）ノ穴址（あと）ハ、二十余歩許アリ、」（原文は漢文）とあるように、八世紀の頃、すでに当時の人々に貝殻の堆積した有様が知られていた。これが大串貝塚とよばれるものである。

この大串貝塚は昭和十一年と同二十五年に発掘されている（6）。その報告によれば、谷田貝塚から発見された関山式土器より一時期古い花積（はなずみ）下層式土器の時代から、谷田貝塚の終わりの頃まで、この付近にも同じ時期の集落があったと考えられる。

谷田貝塚を残した人々の後には、諸磯（もろいそ）式土器といって、半截竹管（直径五ミリほどの籐を半分にさいたもの）によって爪形の連続文様をほどこし、または竹管の先端を刺突して凹文をつけることを好んで用いた人々の遺跡が発見されている。それは谷田町や袴塚町・飯富町安土星（あとぼし）・下国井町権現山・那珂町西木倉（にしきのくら）・勝田市市毛（いちげ）・同東中根虎塚付近・那珂湊市小川貝塚などである。

この時代の食生活は狩猟と漁撈に終始していたが、大串貝塚や谷田貝塚の遺物をみると、彼等がとくにシカ・イノシシ・ヤマトシジミ・ニホンシジミを常食としていたことが推測される。また石器類では石鏃（ぞく）（矢の根石）と石錘（すい）（石製のおもり）礫器（こぶし大の楕円形の自然石に打撃を加えた荒けずりの石器）など若干の遺物が大串貝塚から出土している。

このように縄文式時代の前期は、花積下層式土器の時代から諸磯式

土器時代までにかかなり長い時期を経た。ところが貝塚や包含遺跡（同じ時期の遺物を多量に出す遺跡）をみると、人口は少なく、その集落は早期と同様に、湧き水近くの台地の縁から移動していないし、小規模に営まれている。住居址は水戸付近では発見されていないが、他の遺跡例では竪穴（たてあな）式のいわゆる天地根元造りで、平面は長方形のようであったから、家族構成もせいぜい四、五人を単位としたものであろうと思われる。縄文式時代前期の人々の生活ぶりは、おおよそこのようなものであった。谷田貝塚のできた頃まで台地のへりを洗った海水は、諸磯式土器を使用した前期の終わりに後退しはじめたが、この時期に人々の生活は大きく変化することになる。縄文式時代の中期はこうして始まる。

縄文式文化の発展

縄文式時代の早期や前期を縄文式文化の準備期間であったとすれば、縄文式時代の中期は飛躍の時代であったといえよう。前期末の諸磯式土器の頃から後退しはじめた海水は、中期に入っても後退をつづけた。貝塚は元吉田町や勝田市三反田・大洗町吹上には見られても、もはやそれ以外の地域には発見されていない。

しかし、貝塚の見られなくなったかわりに、人々は平坦な台地を求めて続々と移動していったから、この時期の遺跡は水戸では備前町や栄町など、台地に深く入りこんだところにも発見されている。またいままでのように、谷田町から千波町にいたる西北面の台地や、渡里町から飯富町にかけての台地、上国井町・下国井町・田谷町など那珂川に南面する台地など、広い範囲に発見されるようになった。

那珂川流域では、中期の初め頃には阿玉台式土器が多くつくられた。この土器は主として霞が浦を中心とする県南地区で盛んに用いられた

土器で、那珂川流域でも、那珂郡大宮町若林など、かなり北によったところからも発見されている。土器には多量の雲母を含み、器壁は厚く、その文様は隆起文や渦巻状の張り付け文と爪形・刻目を主とし、口唇部には把手状の装飾を付している。一般に、この阿玉台式土器に先行する土器に五領（ごりよう）ケ台式土器があるが、この土器は那珂川流域では市内谷中（松本町）にある藤田東湖の墓の北東斜面で採取したのみで、その他には発見されていない。

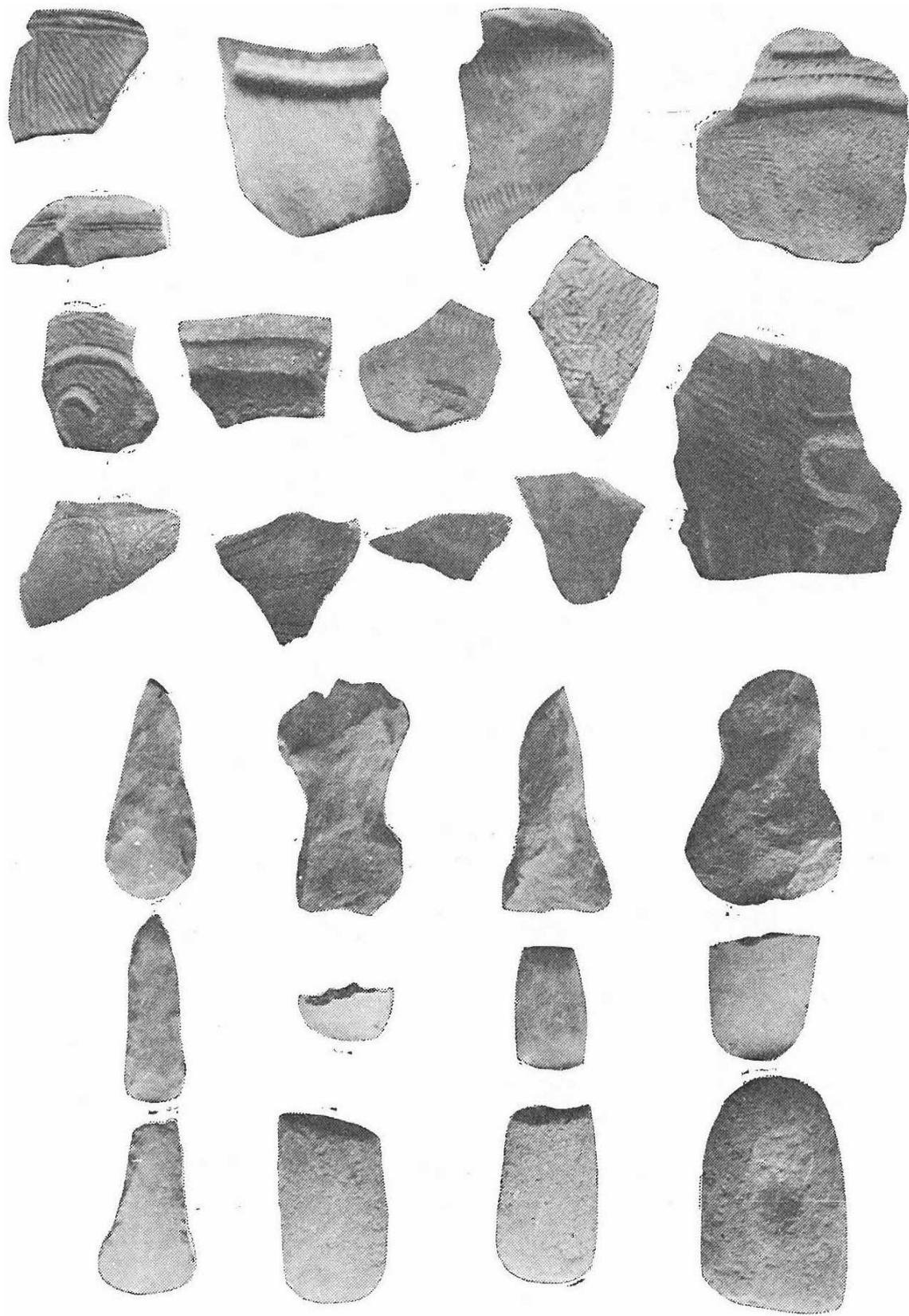
吉田貝塚

昭和三十七年のある日、県立水戸工業高等学校から市吉田浄水場にいたる坂道に、水道管を埋めた際、貝塚らしいものが発見された。

そこにはおびただしい貝殻と共に豊富な土器も散乱していた(7)。調査の結果、貝塚であることが確実になった。この貝塚から発見された土器には、雲母を含むものと、含まないものと、二つの形式の土器があり、その表面にほどこされた文様には、荒い縄文やひも状に張り付けた隆起文がみられる。この隆起文の両側に篋状の押し付けた文様があり、また渦巻文があることによって、これらの土器が阿玉台式土器と、かなり東北地方の大木（だいき）式（8A）土器の影響を受けた土器であることがわかる（第六図）。また以上の土器のほかに、この土器に続く加曾利 E 式土器も出土している（第七図）。



第 6 図 吉田貝塚大木 8A 式土器



第7図 吉田貝塚出土縄文式土器および石器 一元吉田町一

加曾利 E 式土器は中期の終わりにあらわれ、水戸付近では、台地の畑などで目に触れる土器の大部分がこの土器に属するほど一般的な土器である。この土器には、阿玉台式土器のように雲母を含むものもあるが、雲母を含まないものが多くなる。文様も阿玉台式土器に比べて退化し、単斜行縄文と懸垂（けんすい）文（S 字状にたれ下る文様）、渦巻文等に変わり、全体にあらい縄文と沈線を付している。器形は口縁部より胴部の上にかけて一たんふくらみ、胴部より底にかけて筒状につぼまる。底は平底で、口径五〇センチ、高さ七〇センチ前後の大形のものと、口径二五センチ、高さ三〇センチ前後の中形のものがある。焼きはよく器壁は厚い。

加曾利 E 式土器の用いられた時代は、人口が増加したばかりでなく、生活活動も活発であったから、種々の生活用具が用いられている。なかでも石器は最も利用されたものであるだけに、精巧なものも多く、石鏃・石斧・石皿・たたき石・石錘等があり、とくに上国井町の飛行場跡や全隈町から、石斧が多量に発見されている。次にそれらの石器について述べよう。石皿は渡里町長者山や上国井町・元吉田町等から出土している。楕円形で扁平な一七、八センチの片面をえぐったもので、すり石といわれるこぶし大の卵形の石と共に、木の実やその他の食物をすりつぶしたり砕くために用いたものであろう。また石皿の裏面には直径一・五センチ、深さ一センチ位の円錐状の孔があげられているものが多い。これを凹（くぼみ）石とも、発火石ともいっている。火を起こすために使用したものと考えられている。漁撈に用いた石錘は扁平な楕円状の石の両端を打ち欠いたもので、網の錘りにしたものである。縄文式時代後期の谷田町遺跡からも発見されているが、中期には那珂川などでは、すでにサケ・マス漁などに網を使用するようになったことが考えられる。大串貝塚からはタイ・スズキ・ボラ・フグ等の魚

骨が出土しているところをみると、河川のみでなく、海でも網漁が行なわれ、石錘の使用されていたことが推定される。

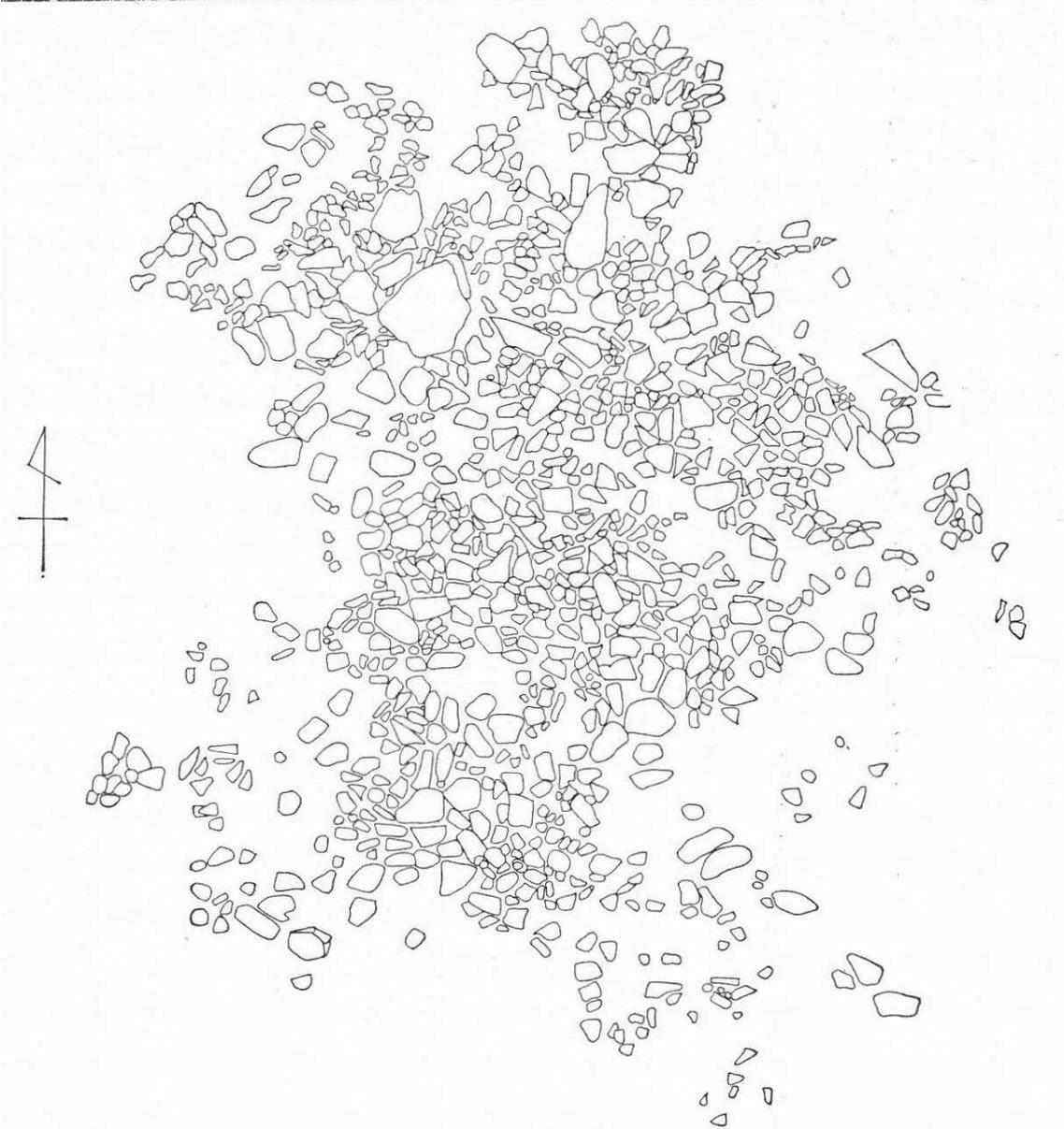
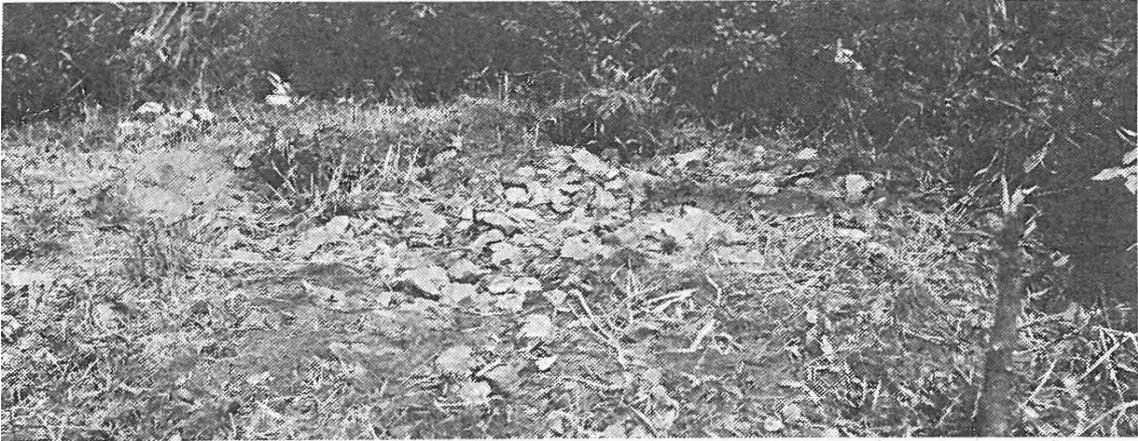
勝田市東中根では、加曾利 E 式土器を加工した土錘も発見されている。石斧には打製のものと磨製のものが出土している。打製では中間のくびれた分銅状のものをはじめ、斧形のものや乳棒状のものがあり、磨製石片では刃部を蛤刃としたものが多く発見されている。これは工具とか農耕に用いたものであろうという。

全隈町の集石址

全隈町から木葉下町に越える一四〇メートル位の尾根に、五百個から一千個位のこぶし大の石を堆積した場所が、五〇メートル平方位のところに三カ所発見されている(8)。この集石址からは多数の打製石斧や半加工状態の石片が出土した。石斧を作った所か、単なる集石場かはまだわからないが、もし石斧を製造した跡ということになれば、全国でも数少ない石器製造址ということになるろう(第八図)。

当時の交通路は山の尾根のような見通しのきくところを利用したから、原石を採集した後、一時このような場所で粗形としたか、あるいは運搬し易くした上で、交易したのかも知れない。石斧ばかりでなく、石鏃や石錘なども同様にして供給され、各集落で加工されたものと思われる。縄文式時代後期の遺跡ではあるが、谷田町では石鏃を加工した石屑が多量に出土している。

縄文式時代中期は台地のあらゆる地域にその遺跡が発見されているから、その集落も付近に営まれていたのであろう。その例として上国井町からはわずか五〇メートル四方の狭い範囲に、五、六個の石組の炉跡が発見されている。また勝田市東中根では集落の周囲に、巾五メートル、深さ二メートル位の V 字形の環濠をめぐらしたものが知られ



第 8 図 全隈集石址全景 -全隈町-

ている。住居は円形か楕円形で、直径五、六メートル前後のものが多く、ローム層に三〇センチほど掘りこまれ、中央に石組か粘土製の炉をもち、六本の柱穴がみられる。天地根元造りであったことは前代と変わりはない。住居の大きさが直径五、六メートル前後であることからみて、一戸平均五、六人を単位とした家族構成をもっていたらしく、しかも広い範囲に住居址のあることから考えれば、早期や前期のような分散的な生活形態ではなく、かなり集団的な生活形態が整えられていたことが察しられる。

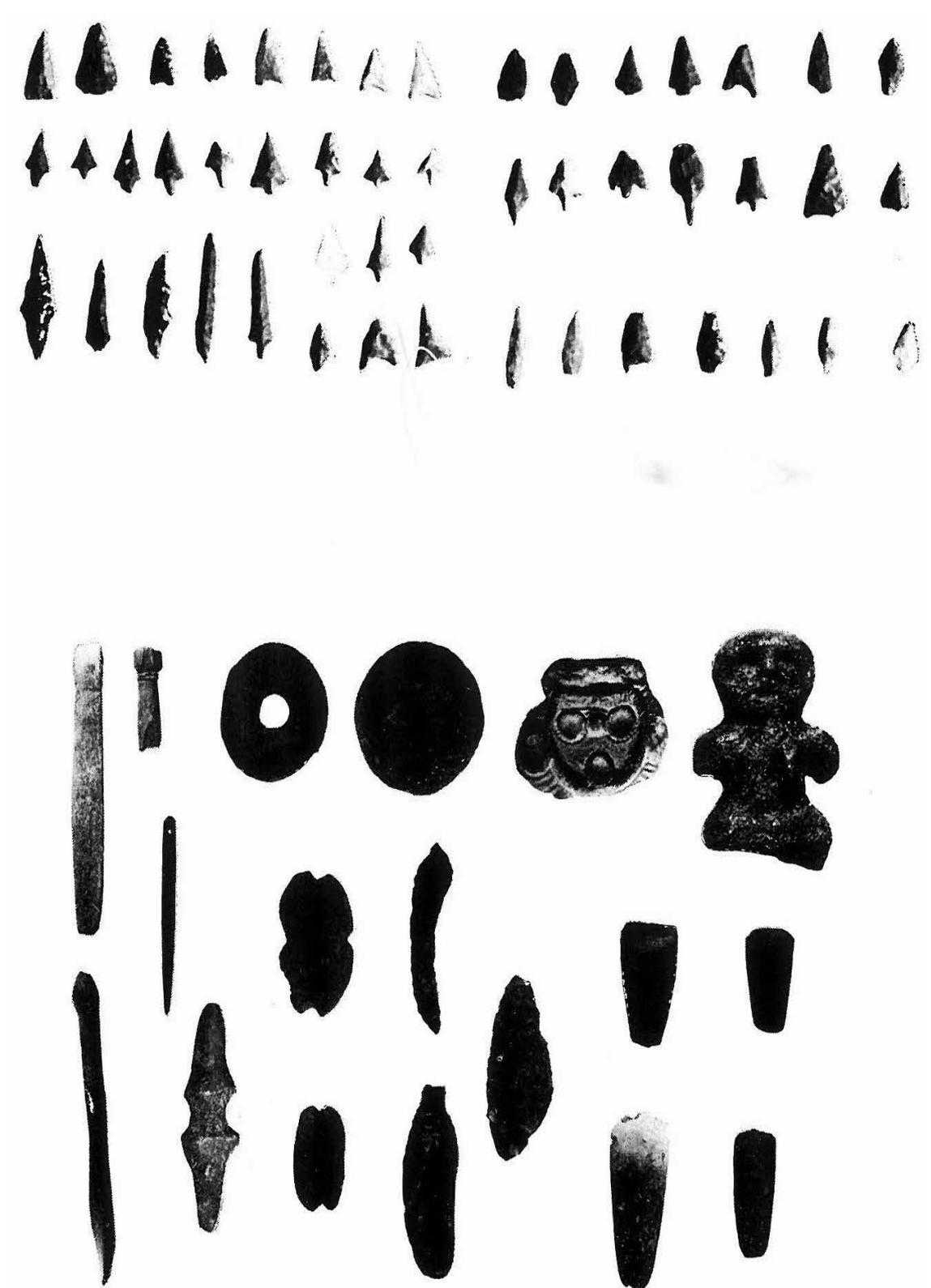
谷田遺跡

谷田貝塚に連なる西北の緩やかな台地は、縄文式時代後期の遺物を豊富に出土する(9)。この遺跡からは中期の加曽利式土器に続く、堀の内式土器や加曽利 B 式土器が発見されている。堀の内式土器には、中期の加曽利 E 式土器の影響がみられるが、器形は小形となり、甕形や鉢形・壺形などのほかに注口土器などがあらわれ、生活内容の複雑化を示している。焼きもよく、薄手で平底の表面にはアンペラやカラムシなどの圧痕がほどこされている。文様は三角形や菱形などの沈線文様と、八字付点文(数字の 8 のような文様)がみられ、中期のあらい縄文に代わって、縄目文の上に磨きをかけた磨消縄文になる。加曽利 B 式土器では口唇部に刻目文様があらわれるほか、平行沈線文や格子目文様がほどこされている。

なお安行(あんぎょう)式土器の破片も出土している。この土器は全隈町や田谷町平塚・成沢町下宿からも発見されているが、その内容は明らかでない。

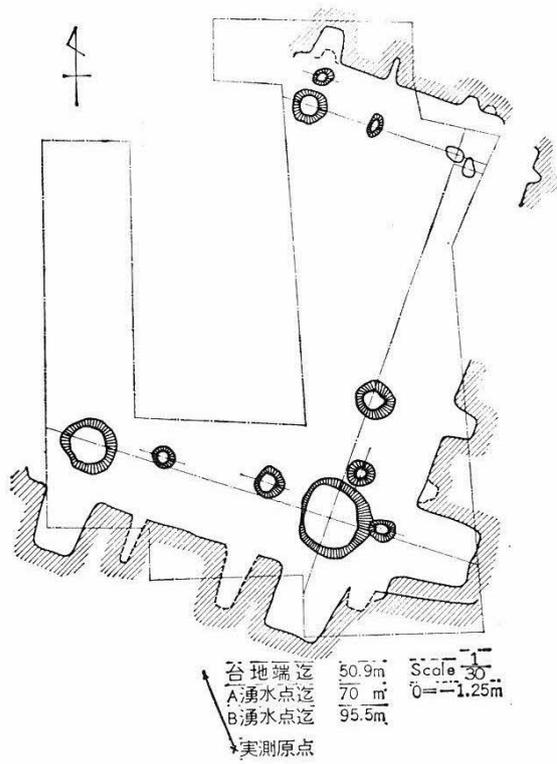
谷田遺跡からは土器のほか、石鏃・石錐・石錘・石小刀(スクレパーともいい、皮はぎに用いたと考えられるもの)や、装身具としての碧玉

製の丸玉（ネックレスに使用したと思われる）石製のヘアーピン・土版・岩版・土偶（どぐう）（土製の人形）・石棒（いしぼう）といわれる呪術または宗教的性質をもつものが発見されている（第九図）。



第 9 図 谷田遺跡出土遺物 - 谷田町 -

土偶・耳飾・石斧・石小刀・石錘石棒・独钻石・ヘヤーピン



第 10 図 アラヤ遺跡全景および住居址 - 渡里町 -



第 11 図 アラヤ遺跡出土土器および拓影 - 渡里町 -

渡里町アラヤ遺跡

長者山の西北の台地上にあり、水戸付近では数少ない晩期土器を出土している。この遺跡では後期の加曾利 B 式土器のほかに、大洞 B 式土器（岩手県大船渡市赤崎町字大洞出土の土器）や大洞 BC 式土器も発見されている。器形は皿形で小形のもが多く、雲形文や平行沈線文の文様をもち、口唇部に瘤（こぶ）状の小突起がみられる（第一一図）。このアラヤ遺跡に発見された大洞式土器と、南関東地方の安行Ⅱ式以降の土器の交錯関係が、水戸付近ではどのように展開しているかはまだ明らかでないが、弥生式時代前期に位置する下館市女方（おさがた）遺跡でも、大洞 BC 式土器が伴出されているところから推定すれば、あるいはこの時期をもって那珂川流域の縄文式文化は弥生式文化へと移行したのではないかと考えられる。

後期から晩期の住居は、中期の円形のものから、長方形または方形に変わるのであるが、中期に比べて発見例が極めて少なくなる。このことは、竪穴式住居のほかに、高床式住居（現在のように平地に建てられ、床を有するもの）や平地住居が発達したためであろうと推定される。アラヤではローム層の上部に数個の柱穴が長方形に確認されたが、もしこの遺構がアラヤ出土の遺物に伴うものであるとすれば、すでに高床式住居がたてられていたのかも知れない（第一〇図）。住居が竪穴式的な住居から平地住居へ移動するようになった原因は、おそらく食生活の変化に求められると考える。

- 注 (1) 杉原荘介氏「群馬県岩宿発見の石器文化」明治大学文学部研究報告考古学 第一冊 昭和三十一年
- (2) 日本考古学協会編「日本洞穴遺跡地名表」（第一版）芹沢長介氏「旧石器時代の諸問題」日本歴史 岩波書店
- (3) 杉原荘介氏 日本考古学協会第二十三回総会シンポジウム、「無土器

時代文化の諸問題」による。(ミシガン大学の測定)その紹介によれば縄文式時代早期の夏島貝塚の貝殻では九四五〇年±一四〇〇年であるという。

- (4) 杉原荘介氏・芹沢長介氏「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」
明治大学文学部研究報告考古学第二冊
- (5) 伊東重敏氏「北茨城に於ける縄文早期田戸下層式出土遺跡」=みち=
ヒタチジ第十二号 昭和二十九年
- (6) 田沢金吾・大場磐雄・池上啓介・宮崎糺諸氏「大串貝塚」史前学雑誌
第九卷第二号 昭和十二年 酒詰仲男氏・広瀬栄一氏「茨城県東茨城
郡大串貝塚調査報告」日本考古学一の五 昭和二十五年 大森信英氏
「茨城県東茨城郡常澄村大串貝塚について」昭和三十五年
- (7) 郡司良一氏報
- (8) 伊東重敏氏の発見による。昭和三十七年、大森信英氏等発掘
- (9) 後藤道雄氏・鳥羽田重行氏「谷田遺跡について」史窓 1

第二節 那珂川流域の原始農耕文化

紀元前一、二世紀の頃、すでに西日本では大陸文化の影響をうけて、新しい弥生式文化が発生した。この弥生式文化の特徴は、農耕文化の発生と金属器の使用にあった。

しかし、那珂川流域の弥生式時代の遺跡からは、いままでの調査では、金属器は発見されていないから、この地方の弥生式文化は、農耕文化に伴って発展したと推定される。しかもその農耕も弥生式時代の後期から栄えたにすぎない。水田耕作に伴う食生活の変化は、縄文式時代の狩猟・採集という単純な生活とは異なり、きびしい労働力や、用水・栽培・収穫等の管理を必要とした。また、農耕は労働力を結集させ、定住と集団の生活を余儀なくさせ、貧富の差を生じさせることになり、しだいに部落的な小国家を発生させたのである。

弥生式文化の起こり

水戸地方をふくめた、利根川以北の弥生式土器は、西日本から東海地方にかけて発達した弥生式土器とはかなり性格を異にしたものであった。従来から水戸付近では、縄文式時代の強い伝統の上に形成された接触式土器（縄文式土器から弥生式土器に移行する中間形式の土器）、続縄文式土器とも呼ばれた十王台式土器があり、県西地方では女方（1）・栃木県野沢などから出土する土器が、これと同系統のものとして知られていた。

ところが太平洋戦争後になって、水戸地方でも、弥生式土器の研究が盛んとなり、市内の柳河町をはじめ水戸に近接する茨城町長岡（2）や、勝田市津田・黒跨（ばかま）・東中根・大和田などからも、十王台式土器前後の土器が発見されるにいたった。そしていままで接触式土

器と呼ばれた土器こそ、実は北関東地方に発達した弥生式土器そのものであり、弥生式文化の所産である（3）ことが確認された。

すでに述べたように、弥生式時代に入る頃には、那珂川の兩岸や千波湖をはさむ台地のへりには、沖積地が現われていた。しかし、那珂川は洪水のたびごとに流れを変えて広い氾濫原をつくり、また千波湖も現在とはちがい、藤柄町から根積町あたりまでの広がりをもっていた。また、吉沼町をはじめ下市一帯は、いたるところに葦の生える沼地が見られたのである。そのため、那珂川流域の弥生式時代の人々の生活範囲も、台地の辺りを中心とした地域に限られていた。

那珂川流域の弥生式文化の展開は、彼らの残した土器によって知ることができる。その土器をみると、那珂川流域では、最も古い形の土器として、壺形の土器が那珂湊市小谷金から発見されている。この土器は、県西地方の女方出土の土器や、野沢出土の野沢Ⅱ式（栃木県野沢出土の弥生式中期の土器）に類似し、胴部に渦巻文をもち、全体に磨消（すりけし）縄文を付けており、その中には靱の圧痕を残すものも出土している。この小谷金の位置は、那珂川に面した台地の縁にあたり、その付近にも同種の土器片が発見される。

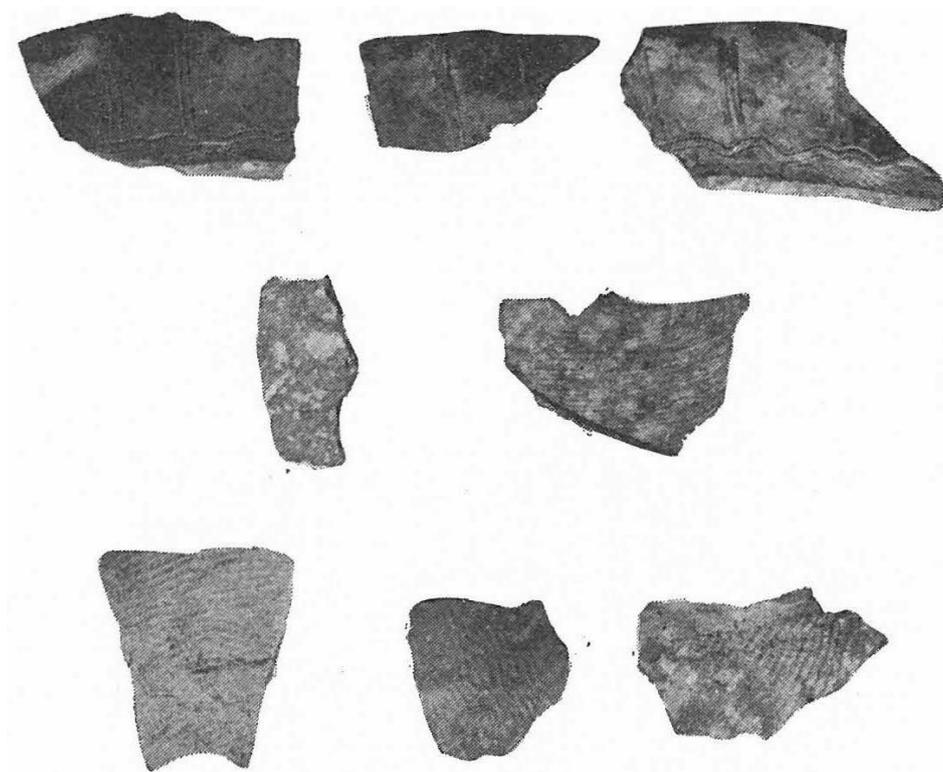
小谷金出土の壺形の土器が、女方出土の土器に併行し、女方遺跡に縄文式時代晩期の大洞 BC 式土器を伴出する事実は、那珂川流域の弥生式時代が、紀元一世紀の頃に始まり、同時期にはすでに水稻栽培の知識をもち、谷間の湿地には小規模な水田が営なまれていたことを推定させる。

水戸地方の弥生式時代前期の土器には、小谷金出土のものほかに、勝田市中根、八重崎から発見された壺形の土器がある。

この土器は、胴部を細く半截（はんさい）にした竹管で渦巻文を描き、その下に太（ふと）目の縄文をほどこしたもので、渦巻文様を特徴

とすることは、小谷金出土のものと同様である。

弥生式時代の中期になると、勝田市津田、黒跨から、壺形のほかに甕形土器を伴う土器が発見されている。この土器の文様は、前期の土器にみられた渦巻文にかわって、二重弧文（円弧状の文様を二つ重ねた文様）と幾何学的な直折文（山形状の連続文）がみられる。この土器の口縁部は複合口縁といって、口縁に巾一・五センチ、厚さ二ミリ前後の帯状の粘土の張り付けが見られるようになり、胴部の文様も楡目文と単方向撚糸文様（同一方向に細目の縄文を連続して付すもの）がほどこされている。器形も壺形のほかに甕形もあらわれるが、口径二〇センチ、高さ三〇・五センチ前後の中型のものが多い、またこの土器に類似した土器で、胴部に二重弧文や直折文のほかに、羽状縄文を付したものが、東茨城郡茨城町長岡や市内柳河町の柳河小学校々庭、田谷町富士山古墳の前方部から発見されている。（第一二図）



第 12 図 富士山古墳出土弥生式土器 ー田谷町ー

この土器は黒跨出土のものよりはいくらか遅れて現われたらしく、柳河小学校のように、那珂川の沖積地に出土しているので、水戸付近のその頃の生活では、中期の後半に台地上から、低地へ移動しはじめたと思われる。

しかし、生活の主体は、依然として台地上にあったらしく、茨城町長岡遺跡（もとの長岡中学校の校庭）では、標高二〇メートルの台地上に二十数個の集落が発見されている。

	年 代	地方	南 関 東	北 関 東	水 戸 付 近
		区分			
弥 生 式 土 器	B. C 300	前 期			
	B. C 100	中 期	須 和 田 宮 ノ 台	野 沢 I 野 沢 II	八重崎 クロマタギ (クロバカマ) 長岡
	A. D 100	後 期	久ヶ原 弥生町 前野町	水 沼 石 田 川	
	A. D 300				前野町
土 師 器	A. D 400	前 期	和 泉 式		(+)
	A. D 600	中 期	鬼 高 式		(+)
	A. D 700	後 期	国 分 式		(+)

(註) (+) は同形式の土器のあることを示す。

第 3 表 弥生式土器及び土師器編年表

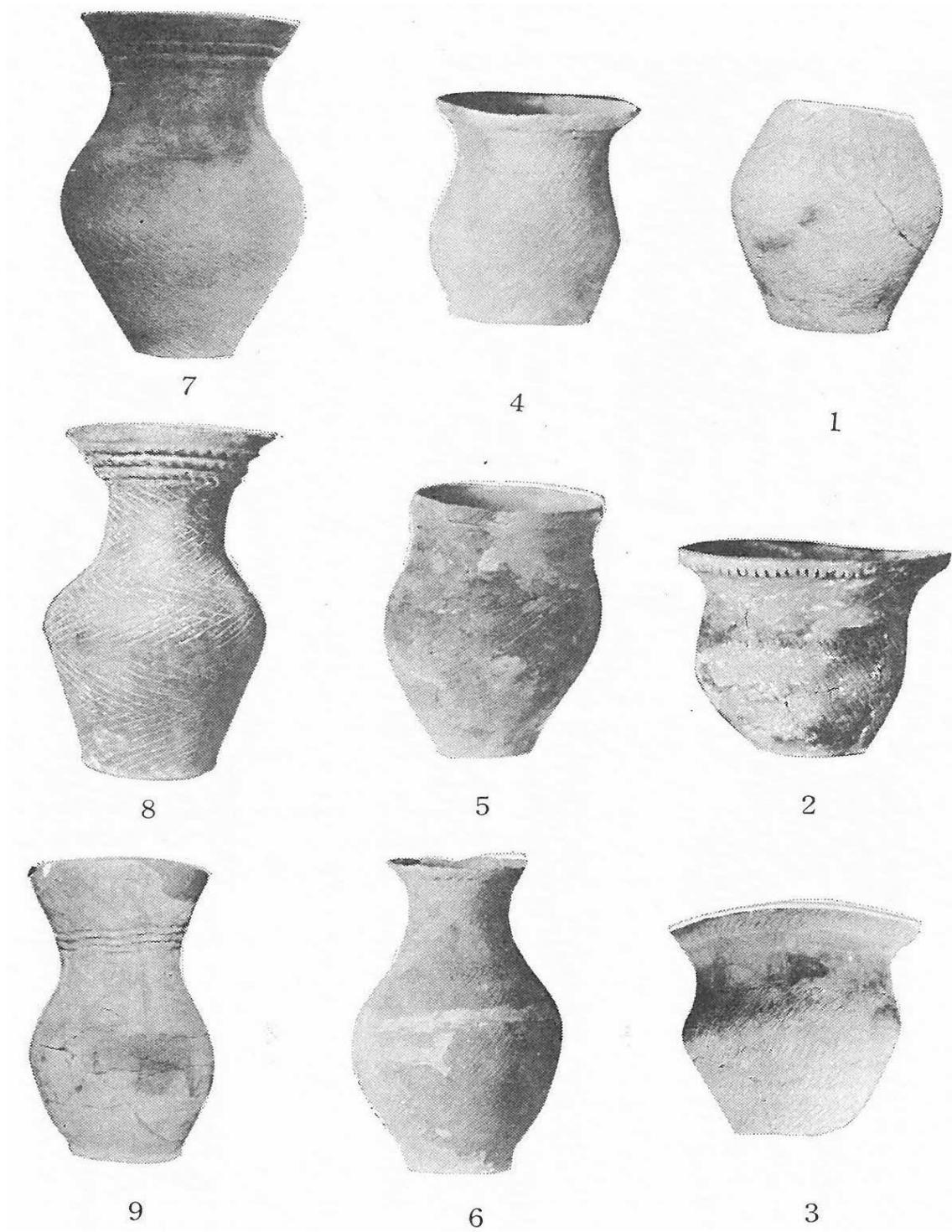
住居がローム層に掘り込んで作られていることは、縄文式時代と同様であるが、方形または長方形の住居が多い。その一つを見ると、火災にあった短辺四メートル、長辺八メートルの長方形の住居址がある。柱穴は床面をくぼませた程度であるが、壁にそって八個の土器が並び、住居内部にはケヤキの丸太材八本と、榎木に用いたと考えられるクヌギの細材がその上に並んで発見されている。この住居を復元すると、中央付近に炉をもち、ケヤキの丸太とクヌギの榎木を用いた切妻形の

住居であったことが想像される。

農耕生活の発達と柳河遺跡

弥生式時代の中期にみられた沖積地への集落の移動は、後期に入っ
ていよいよ盛んになった。水源のあるところは勿論、台地や河川にの
ぞむ沖積地への進出がみられ、大規模な集落が発達した。水戸地方で、
農耕生活が広範囲に展開されたのもこの時期である。

この時期は十王台式土器時代にあたり、静岡県登呂遺跡の時代に併
行する。遺跡は柳河町下河内・田谷町矢の倉・同町平塚・上国井町軍民
坂・東照宮境内・愛宕山古墳付近・桜山・見和町・千波町本郷・元吉田
町・谷田町・飯富町安土星・田野町・藤井町十万原・河和田町前原に発
見されている。なお那珂湊市の櫃原神宮境内からは十数個の住居址群
も発見されている。



第 13 図 那珂川流域出土弥生式土器

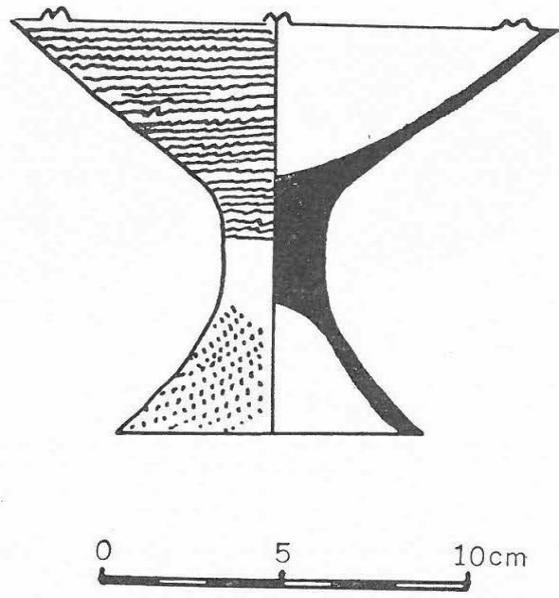
1. 勝田市八重崎 2. 3. 4. 5. 6. 茨城町長岡 7. 東海村米崎
8. 勝田市黒跨 9. 那珂町中台



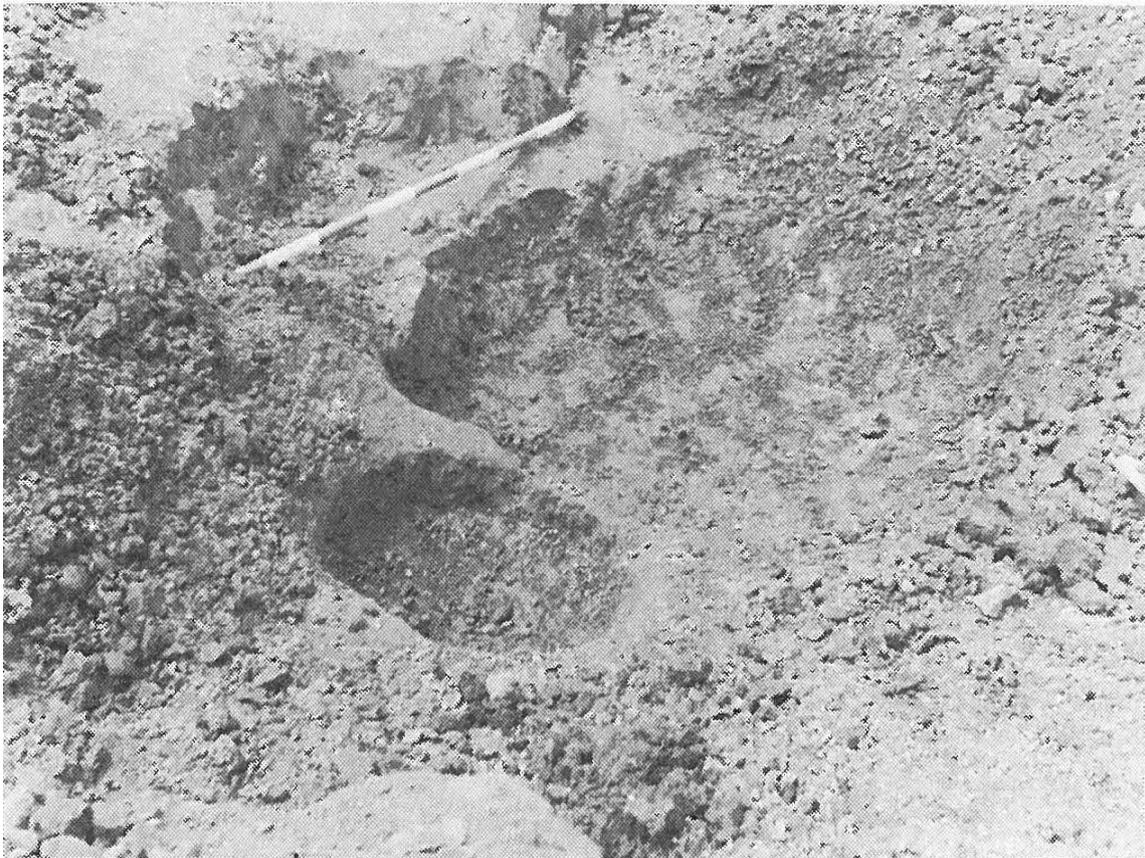
第 14 図 十王台式土器 —東海村—

十王台式土器（第一三図）は中期にみられた甕形土器のほかに高坏形のものもあるが、一般には頸の細長い、いわゆる長頸の壺形土器が発見されている。この土器は口縁部に、櫛目によって、横に走る波状文や格子目文様をほどこし、頸部から胴部にかけて三条ないし四条の縦に走る櫛目文と、横に走る櫛目状の波状文を交錯させた上、四条以内の隆起帯を張り付けている。胴部以下は撚糸文が羽状に付されているものが多いが、単斜行（単方向）文もみられ、底部には布目の圧痕や、木の葉の圧痕を有するものが普通である。

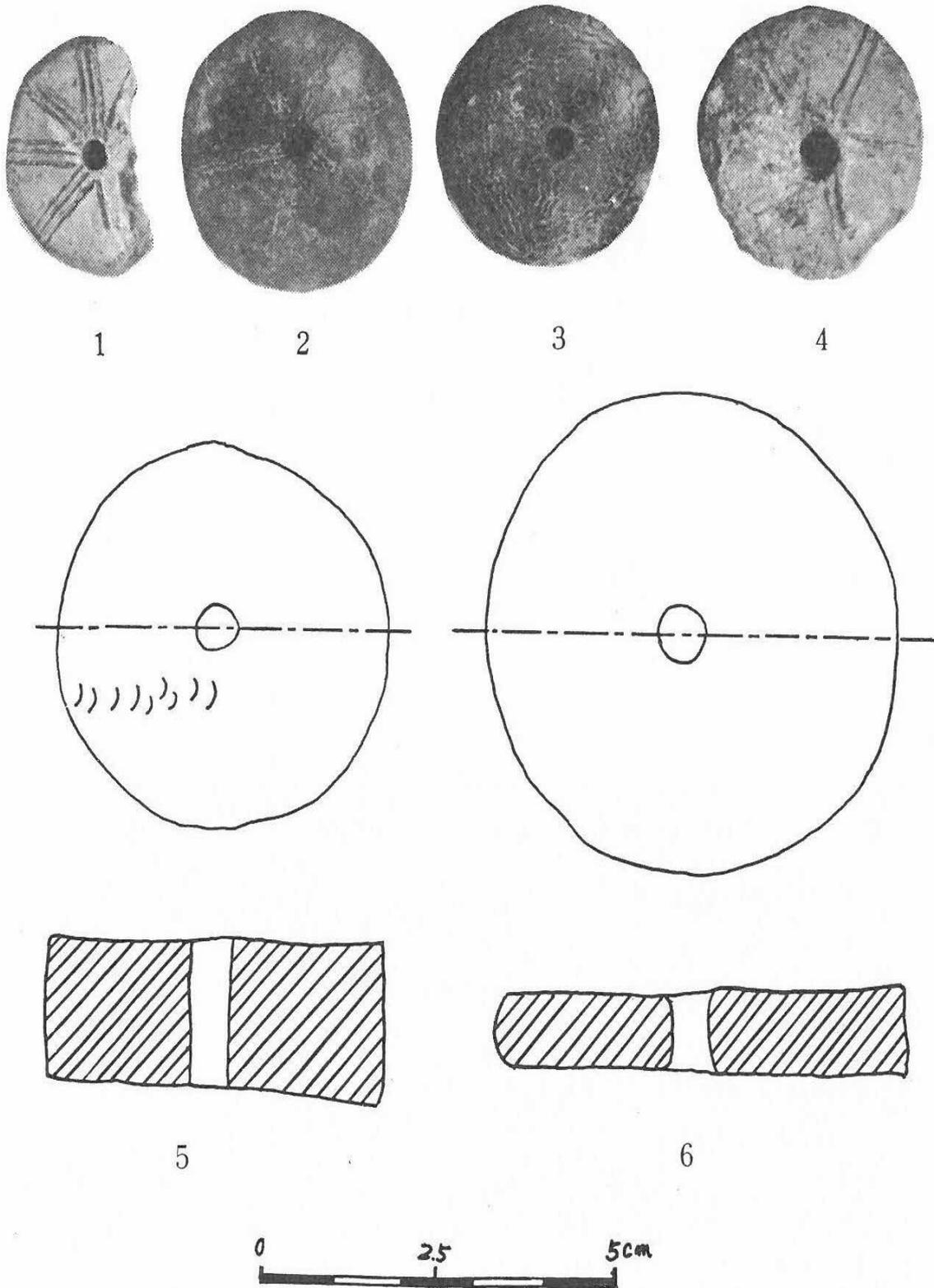
また十王台式土器には、同一の長頸壺形土器でありながら、隆起帯と格子状細繩文のみを付す、無文にちかい高さ五〇センチないし六〇センチほどの大形の土器が発見されている。さきに述べた装飾のある土器が、高さ二〇センチ前後の比較的小形の土器であることと考え合わせるとき、単純な文様を付したこの大形の土器は、おそらく実用的な容器として、日常の煮沸や、貯蔵に用いられたものであろう（4）。



第 15 图 十王台式土器実測図 一勝田市堀口一



第 16 图 柳河小学校庭弥生式竖穴址 一柳河町一



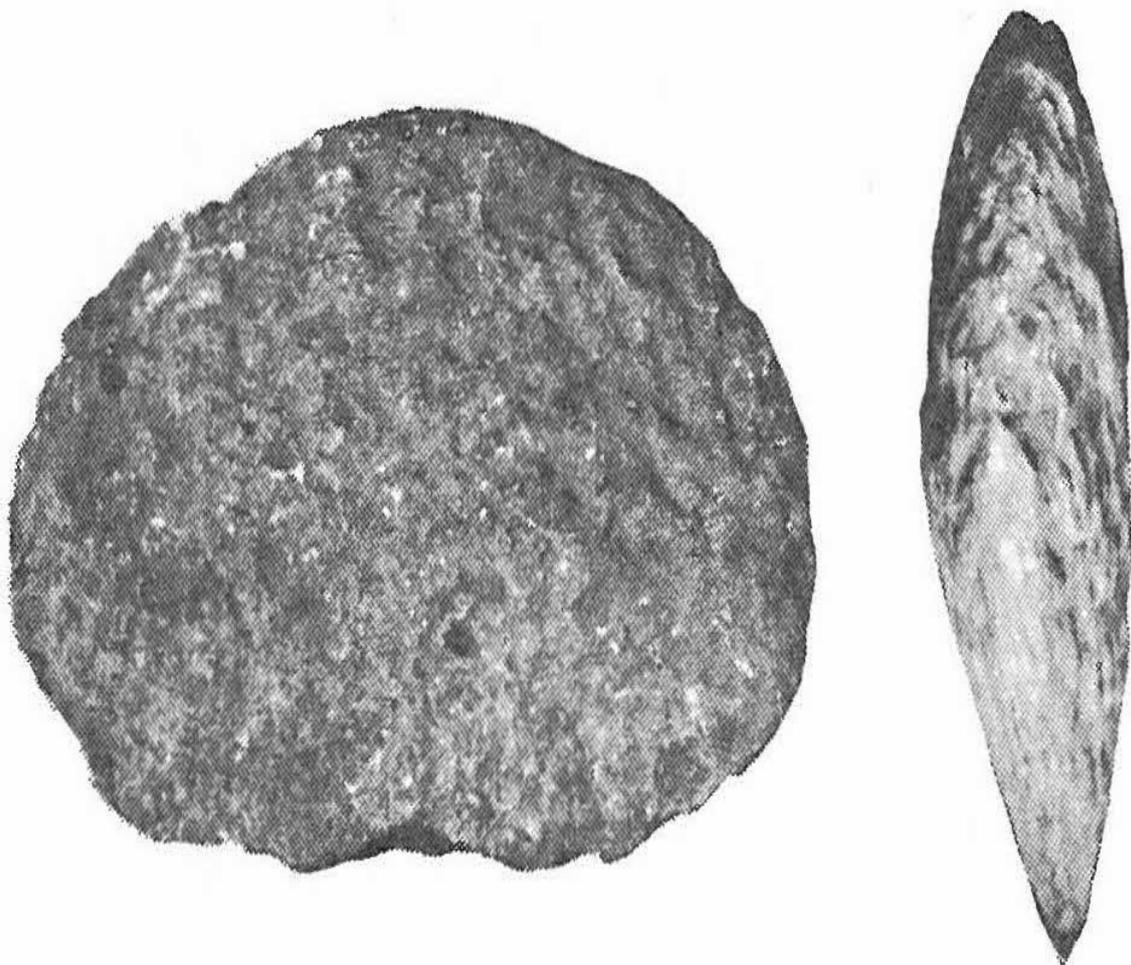
第 17 図 水戸付近出土紡錘車 1. 2. 4. 柳河町 3. 開江町
5. 6. 那珂町西木倉

しかし、小形の土器の中にも、この時期には、広口の一五センチ位の甕形土器（第一四図）が那珂郡東海村海後から出土しているし、また勝田市堀口遺跡からは、高坏形の土器（第一五図）も発見されているところをみれば、これらの小形土器が、共に実用に供されたものであることが考えられる。

昭和三十七年八月、市内柳河町柳河小学校の校庭から、長径一・七メートル、短形九三センチ、深さ四〇センチ前後の瓢箪形の穴が発見されて、（第一六図）その内部から禾本科系植物の炭化物といっしょに、長さ二五センチ、巾四センチ、厚さ二五センチほどの炭化した角材や、大形に属する十王台式土器・紡錘車（ぼうすいしや）（糸をつむぐ時に用いた土製の錘（おもり））三個が出土した。（第一七図）この穴の底面と思われるものは粘土質の土層で関東ローム層と同質であることから、沖積地に営まれた住居址にも、台地に見られる住居地と同様に、粘土を張りつめて床面としていることを推定できる。この穴は住居に付属した貯蔵穴と考えられる。しかしこの遺跡では、各時期の住居址が重複して発見され、かつ穴の東に住居址が続くとも考えられるため、確かなことは断定するまでにはいたらなかった。現在推測できるところでは、この時期の住居は、ほかの遺跡の例から考えると、一辺五メートル前後の方形か、隅の丸い方形の竪穴（たてあな）式の住居であった。そして低湿地への移住という関係から、当然高床式の平地住居や倉庫もあったと思われる。

柳河遺跡から発見された紡錘車は、直径約五センチ、厚さ八ミリで、中央に五ミリの孔があいている。紡錘車はこの遺跡のほかに、那珂町西木倉からも発見されている。西木倉出土のものは断面が長方形をなすのに対して、柳河遺跡の紡錘車は楕円形にちかい形をなし、その表面には竹管による突刺文を付すものと、中央の孔から放射状に波状文

を付けたものが見られるが、とくに波状文の施法は、十王台式土器にほどこされた櫛目波状文と同一手法であるので、この紡錘車が十王台式土器の時期に用いられたものであることを示しているといえよう。

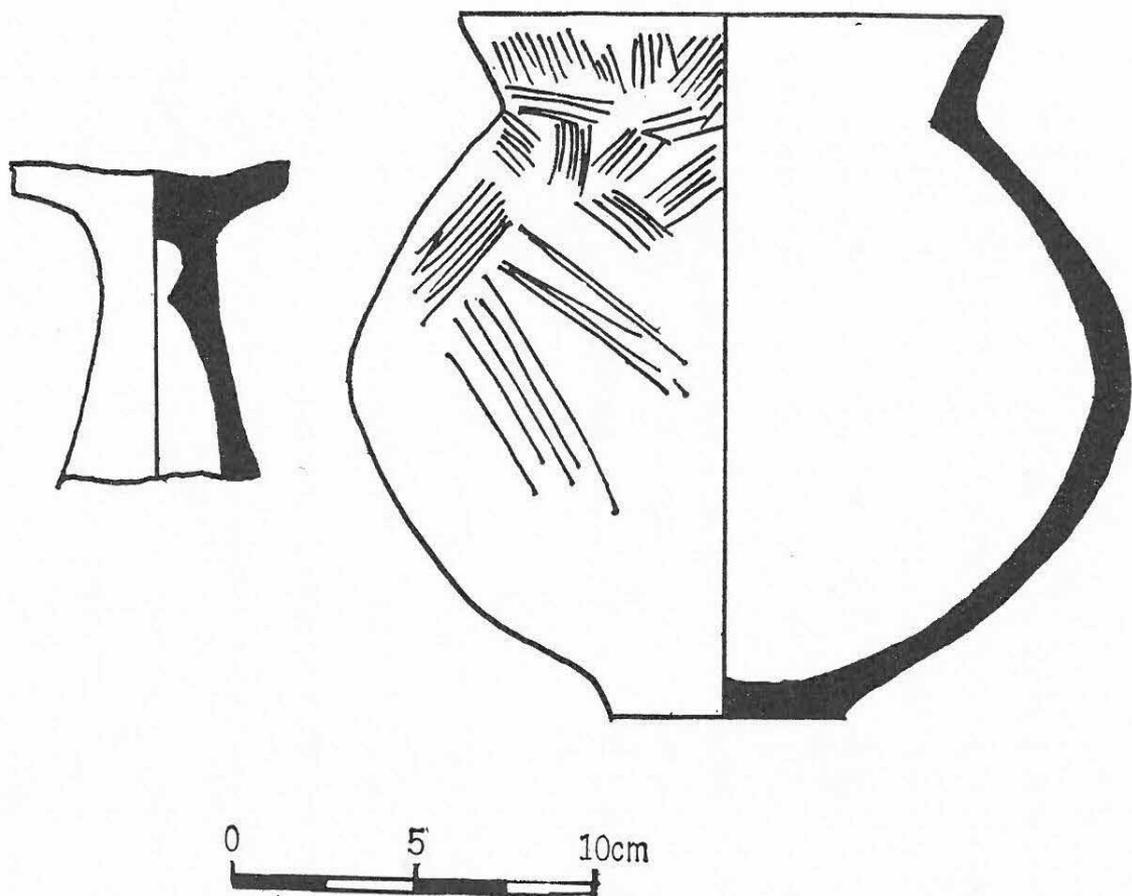


第 18 図 石鎌 —千波町—

十王台式土器の底には布のあとが残されているが、この圧痕を調べた結果によると(5)、当時の人々は、目のつんだ平織りに近い麻布を用いていたらしい。それも、夏には薄手で比較的風の通る布を用い、冬には厚手の麻布を使用していた。また、この時期には有角石斧(石斧状の石器の両側に突起を付けた石斧)が茨城町下土師(しもはじ)から発見

されている。さらに千波町からは、水稻の穂刈り（当時、稲は穂の下で刈り取った）に用いた石鎌（第一八図）も発見されていて、弥生式時代後期の人々の生活が、かなり高度のものであったことが考えられる。

このように水戸地方では、弥生式時代の後期に入って、はじめて水稻耕作の急速な展開がみられた。初期に農耕生活があまり進まなかった理由は、第一には西日本で栽培された当時の稲が水戸地方の風土に適さなかったこと、第二には縄文式文化の生活から抜けきれなかったことなどによるものであろう。



第 19 図 前野町式土器（壺）および和泉式土器（高坏）－柳河町－

弥生式時代の終末と部落の発生

柳河町下宿遺跡や、柳河小学校の校庭の東に、十王台式土器に続く

遺物を出すところがある。すなわち、柳河小学校々庭東の遺跡から発見された土器は、十王台式土器に見られたような装飾文様はなく、わずかに刷毛（はけ）目を残すものが見られるほかは、ほとんど無文の赤焼の土器に変わっている。（第一九図）器の形も手づくねではなく、ろくろを用いた、形のよい広口の壺や甕形の土器で、台付のものもある。そして、この土器では、十王台式土器やそれ以前に発見された土器のような、地方的な特色はまったく失われて、関東地方一円の土器とほとんど共通するようになった。この土器を前野町式土器（東京都板橋区前野町から出た土器を模式とした土器）と呼んでいる。

十王台式土器の時代から、前野町式土器の時代の終わりまでが何世紀頃に当たるかははっきりしないが、紀元三世紀かその前後の頃であろうと推定される。

弥生式時代の終わる三世紀には、西日本から畿内では、統一が進んで、とくに大和の国家権力が強大となり、四方に支配力をのばした。水戸地方でも農耕生活という内部的な変化に伴って、漸次家族を中心とする部落が生まれてきたであろう。農耕生活は集団的な労力を必要としたからである。おそらくその時期は弥生式時代の後期、ちょうど十王台式土器が盛んに用いられた時代であった。しかし、この頃までの間に、水戸地方がこの統一の中に包含されていたかどうかは、まだわかっていない。

注 (1) 田中国男氏「常陸女方遺跡の発掘について」古代文化五 昭和十七年

(2) 伊東重敏氏「長岡遺跡の背景」ヒタチジ第二・三・九号所収井上義安氏「茨城県長岡遺跡の弥生式土器について」史想第七号 昭和三十三年

(3) 伊東重敏氏「常陸地方弥生式土器に関する時差と系統の問題」考古学第十二号 昭和二十八年佐藤次男氏「弥生式土器の一考察」考古学第

十三号 昭和二十八年磯崎正彦氏「天王山式土器の編年的位置に就いて」上代文化第二十六輯 昭和三十一年

(4) 大賀一郎氏「弥生式土器底面の布目について」古文化財の科学第一〇号 昭和三十年

(5) 佐藤次男氏「十王台式壺形土器の二者」那珂湊考古学第一卷 第五十六号